

Sumitomo Foundation News Vol.11

オンライン会議の普及から学ぶこと

コロナ感染に怯える日々も3年目を迎えています。

私たちの生活もいろいろな面で変化がありましたが、ビジネスの世界で一番大きく変わったのはオンライン会議の普及ではないでしょうか。コロナ以前から、インターネットの普及、技術の進歩により、夢物語ではなかったのに、実際に誰もが普通に使うようになったのは、コロナ禍で人との接触が制限されたことが大きな要因でした。

しかしながら、「やはり実際に会うのとは何かが違う」という声も聞かれます。何が原因なのだろうかと思いましたが、「画面越しでは視線が合わないこと、音声と画像が微妙にずれること等が要因となって、リアルでは起こる参加者間の脳活動の同期＝感情の共感が起こらない」、という説があるようです。そうであれば、オンライン飲み会がまったく浸透しないのも頷けます。参加者同士の侃侃諤諤の議論が必要な場では、技術面も含めもっと工夫が必要なのかもしれません。とはいえ、オンライン会議にはその欠点を補って余りある利点があります。お互い移動時間なく時間を共有できることは最大のメリットと言えます。特に、海外の人が参加する時にはその威力を発揮します。先日参加したセミナーでは、講師が海外の遺跡発掘現場から生中継をするというものでしたが、以前であれば想像もできなかったことでしょう。

当財団でも、昨年来理事会や選考委員会などは、原則としてリアルとオンラインを併用するハイブリッド方式で開催していますが、このような環境下でありながら理事会、選考委員会共ほぼ全員の方にご参加いただけたのはオンライン会議のおかげでしょう。

ポストコロナの時代では、マスク着用の必要がなくなってもこうしたリアルにはないメリットのあるオンライン会議がなくなることはないと思われます。今後の技術進歩により、リアル参加者とオンライン参加者が同等に議論できるような環境が整えられていくことを期待します。

主な活動内容（2021年12月～2022年3月）*詳細紹介

*	1.	1月	2021年度国内・海外文化財維持・修復事業助成選考
*	2.	2月	2021年度アジア諸国における日本関連研究助成選考
*	3.	2月	30周年記念図録発刊
	4.	3月	第54回理事会開催

活動報告その1

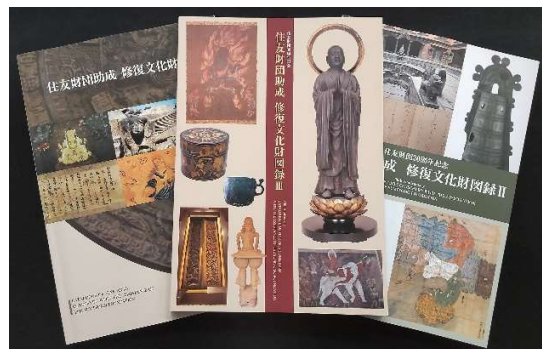
30周年記念図録発刊

住友財団は2021年9月、創立30周年を迎え、これを記念して過去10年間に住友財団の助成を受けて修復された文化財の図録「住友財団助成 修復文化財図録Ⅲ」を刊行しました。

この10年間に財団が行った修復助成は、累計で国内418件、海外179件になります。図録では、この中から、国内77件、海外20件の文化財を抽出しました。

とりわけ今回の図録では、修復前後の写真に加え、一部ではありますが、修復工程の写真を掲載しました。また、巻末一覧には、対象の文化財の修復に関わった事業者の方のお名前を掲載しています。

図録をご覧いただいた方が、文化財に興味をもっていただくとともに、文化財の修復の過程や修復の意義にも理解を深めていただければ、この上なくありがたく存じます。



国内文化財維持・修復事業助成

2021年度は、125件の応募があり、53件（うち30周年記念助成5件を含む）が採択されました。昨年の応募は107件、採択は51件でしたので、応募数で18件、採択数で2件の増加となりました。採択数はこれまで最多であった昨年を上回ったこととなります。

【採択事例】

木造彩色宝珠台(さいしきほうじゅだい)

海住山寺(かいじゅうせんじ) (京都府木津川市) 所蔵

複数の板を合わせて山形とした宝珠台で、表面には山巒(やまひだ)を浅く浮彫りし、一面に石清水八幡宮とその周辺の景観を、他面に聖徳太子が経典を教えている場面を描いています。

鎌倉時代末期ごろの制作と考えられていますが、他に類例が確認されていない貴重な作例です。



薬師如来坐像



大日如来坐像

木造薬師如来坐像及び木造大日如来坐像 興善寺(こうぜんじ) (大阪府泉南郡) 所蔵 <重要文化財>

本堂に祀られている、本尊の大日如来坐像と薬師如来坐像です。いずれも平安時代の作と考えられています。

過去に古社寺保存法に基づき国宝に指定されましたが、1950年の文化財保護法の制定に伴い新たに重要文化財に指定されました。

活動報告その2

海外文化財維持・修復事業助成

2021年度は、23カ国（文化財の所在国では26カ国）からの41件の申請に対して、17件（うち30周年記念助成3件を含む）が採択されました。絵画9件、遺跡5件、工芸品2件、彫刻1件の構成で、壁画（セルビア、エジプト、ウズベキスタン）やイコン（ボスニア・ヘルツェゴビナ）などを含むバラエティに富んだ内容でした。

【事例紹介】

ヴェリキ・クルチミル昇天聖堂（セルビア）の壁画修復

聖堂内部には16世紀の終わりから17世紀にかけ制作された、ポスト・ビザンティン美術に属する伝統的なフレスコ画が描かれており、この壁画の修復が助成対象です。



ヴェリキ・クルチミル昇天聖堂（入口部分）



ドラグティン王礼拝堂壁画（修復後）

セルビアは、日本文化や日本食・武道への関心の高い親日国です。東日本大震災の際には、テニスプレイヤーのジョコビッチがチャリティサッカーを呼びかけるなど、いち早く日本への支援を行った国の一つです。

過去に住友財団はユネスコの世界遺産「スタリ・ラスとソポチャニ」にある修道院の壁画（写真左）を助成対象としましたが、人々の篤い信仰を集める同修道院の壁画の修復は現地でも多くの関心を集めました。

なお、2022年は日本とセルビアの友好関係140周年にあたります。

アジア諸国における日本関連研究助成

アジア諸国と日本との相互理解を深めるためのプログラムで、アジアの大学などの研究者を対象に、日本に関連するテーマに助成するものです。2021年度は前年度並みの494件の応募があり68件が選考され、3月の理事会にて採択されました。

【採択された研究テーマ例】

COVID-19パンデミック後の日本とインドネシア両国間の渡航者増加に向けた政策と実施に関する研究

インドネシア ガジャ・マダ大学職業学校（Vocational College）講師

ファトマワティ・ジャフリ

研究概要

本研究は、現在のコロナ禍とポスト・コロナ時代を見据えた、インドネシアと日本の教育協力政策の評価と、新たな政策アプローチの提言を行うものです。とりわけ教育協力政策による経済的効果（両国間の渡航者の増加—観光、教育、研究目的）に着目しています。



その他助成：新型コロナウイルス緊急支援

2020年初めから感染の拡大した新型コロナウイルスは、日常生活や政治・経済活動に大きな影響を与え、変異株の拡がりもあり、パンデミックの終息は見通せない状況にあります。

コロナ禍は特に難民・障がい者・貧困家庭など社会的弱者の生活に深刻な影響を及ぼしています。

住友財団は、新型コロナウイルスの感染拡大に対し、特定非営利活動法人「難民を助ける会」が実施している日本国内の障がい福祉施設や障がい団体への支援、海外の障がい者やその家族、貧困家庭への支援活動に対して過去3回（合計6百万円）助成を行ってきました。

【日本における支援活動】

障がい福祉施設などに対し、ゴム手袋、マスクや消毒液など衛生用品を広く配布しました。こうした施設では介助など接触を伴うサービスの提供に必要な衛生用品の購入や障がい者とのテレワーク環境の整備に必要な資金に使われています。

【海外における支援活動】

感染の拡大したパキスタンの障がい児の住む家庭に対し、食糧、衛生用品を配布するとともに、各家庭のニーズに応じた支援物資を配布しました。また、山岳地方にあって手洗いなどの衛生習慣に必要な水源や水道設備のない公立小学校に対し、校内の敷地に井戸を掘削しモーターにより取水する設備を整える資金にも充てています。



左：日本の障がい福祉施設
右上：パキスタンの公立小学校
右下：校内に設置された手洗い用設備